

岩手県から北海道へ

氏名 佐藤 加奈子

岩手県花巻市立花巻中学校 → 北海道七飯町立七飯中学校
(期間：令和2年4月1日～令和4年3月31日)

1 岩手県や花巻市の教育

○ 岩手県の教育

- ・「いわての復興教育」・・・被災した沿岸部のみならず、内陸部や県内すべての地域で復興教育に取り組んでいる。「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する」ことを目標に教育活動を行っている。
- ・「心と体の健康観察」・・・毎年8・9月頃に、全県で行われる。経年による変化を踏まえた中長期的な支援を行うことを目的としている。震災で家族を失った生徒をはじめ、震災以外のことについても、ストレス度の高い生徒を知ることが出来る。PTSDの主な症状（フラッシュバックや回避・まひ、過覚醒など）を抱えている生徒を知り、ケアにあたるとともに、軽度症状であっても対処できるよう簡単なコーピングの方法を教えたりしている。
- ・「確かな学び、豊かな学びプロジェクト」・・・「見通し」「(課題解決のための)学習活動」「振り返り」の3つの視点を入れた授業づくりに取り組んでいる。それにより、生徒一人一人を「できなかったことをできるようにする」ことを目指している。また、各校それぞれに、児童生徒の自立的な学習を促すために、授業と連動した家庭学習の取り組みを家庭と連携を取りながら行うことを目指している。

○ 花巻市の教育

- ・「花巻市学力向上アクションプラン」・・・三つの柱「生活・学習環境の向上」「学習者主体の授業改善」「家庭学習の抜本的改善」を中心に、学力向上の取り組みを推進している。教育委員会主体で生徒に家庭学習の重要性などを説明する講演会も行われた。
- ・教育研究所の設置・・・教員で構成される「教育研究所」というものがある。「外国語教育」「ICT活用」「特別支援教育の視点を取り入れた通常学級の授業」など、毎年3～4のテーマで班が編成され、各テーマについて市内の教員4～6名程度が実践研究に取り組んでいる。秋には市内の全教員を対象に発表会が行われている。

2 学校や地域の特色ある教育活動

○ 「自学のてびき」配布による家庭学習指導

全学級で自学ノートを準備させ、平日は1日2ページ家庭学習を行うよう指導し、毎日提出させた。(中1は、入学直後は小6の復習ワークを購入し、家庭学習で取り組ませた。)提出が滞った場合、部活動休養日に居残り学習に取り組ませた。学習委員会

の取り組みで、学級対抗の「提出率点検」や「ページ数点検」などもあった。

○ 長期休業課題「ニュースタディ」の取り組み

長期休業明けの実力テストを作成している業者によって「ニュースタディ」という問題集（5教科でその学期に学習した学習内容の復習内容となっている）が発行されており、期末テスト後から長期休業にかけて取り組ませた。2回解かせるが、1回目はノートに解き、2回目は問題集に直接書き込んで解かせた。ノートの残ったページは自学に取り組ませ、休業明けに提出させていた。

○ 通級指導教室

「勉強のやり方」を指導する個別指導の場として、通級担当教員が配置されていた。

3 私が取り組んできた実践

以下の内容は、平成29年に私が花巻市の教育研究所「特別支援研究班」の一員として取り組んだ内容である。

私は、「特別支援教育の手立てを取り入れた 通常学級における学級・授業づくり」と題して実践を行った。

学級経営の面では、教室環境について、提出物の提出場所を色の違うカゴで示してみると（図1）、白のカゴ一色の時よりは「提出物は毎日同じ色のカゴに出す」というルーティンが出来はじめた。また、教室内に月ごとの行事予定を掲示し、同じ種類の行事を同じ色のペンで囲んでみた。（テストは緑、朝会は青、というように。）また、「今日」という目印を毎日動かした。



提出物の置き場所を色で知らせる。
【図1】

家庭学習ノート(白)と生活記録ノート(青)を提出するカゴ。(生活記録ノートは表紙が青いため、青のカゴにした。)【視覚化】

さらに座席についても、発達障害を抱える生徒の視野に、動くものがあまり入らないよう工夫した。廊下側や窓側、後部座席以外の席になるようにした（【図3】H24埼玉県立総合教育センターの資料参照）。「一番前」よりは「中央寄りの2列目」の方が、周囲の生徒の作業状況を参考にしながら自分で活動できる（一斉の指示により、個別に教師に聞かなくても）ようであった。

◇ユニバーサルデザインの視点を取り入れた中学校の学級経営～過ごしやすい教室を目指して～



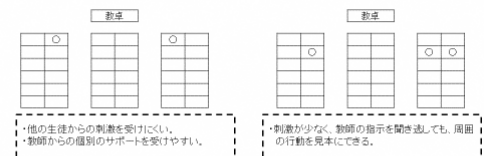
月予定表の掲示。
【視覚化】

活動予定の見通しを持たせる。【図2】

授業の面では、振り返りシートに「学習の見通し」を示し、次時に何を学習するかを、教師の説明無しで見通せるようにした。そして、学習課題と振り返りの記入を積み重ねて記入できるようにした。

中学校は教科担任制、移動教室が増える、学習のスピードも速くなり、プリントも増える、など、小学校との相違点も多い。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学級経営や授業づくりは、「どの子にも必要な合理的配慮」であるといえる。

その他の工夫 ～座席の配慮～ (H24埼玉県立総合教育センター 資料より)
(集中しやすい座席)

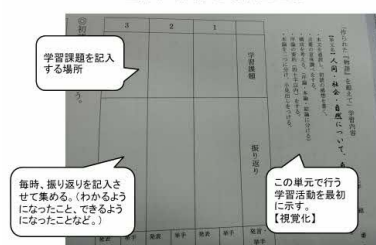


・他の生徒からの刺激を避けたい。
・教師からの個別のサポートを受けやすい。

・刺激が少なく、教師の指示を聞き進んでも、周囲の行動を見本にする。

生徒の困り感を軽減するために、これらの手法を活用しながらも、担任だけで指導にあたるのではなく、部活動顧問の先生や教科担任の先生など様々な先生と連携を取る姿勢を大切にしていきたいと思う。

◇ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践 (中3国語)
～主体的に読み、学ぶ授業を目指して～



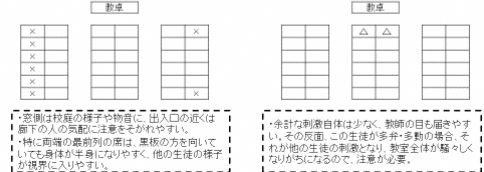
学習課題を記入する場所

毎時、振り返りを記入させて集める。わかるようになったこと、できるようになったことなど。

この単元で行う学習活動を最初にする【視覚化】

【図4】

(集中しにくい座席)



・窓側は授業の様子や物音に、出入口の近くは廊下の人の気配に注意をそがれやすい。
・特に両端の最前列の席は、黒板の方を向いても身体が半身になりやすく、他の生徒の様子が視界に入りやすい。

・余計な刺激自体は少なく、教師の目も届きやすい。その反面、この生徒が多弁・多動の場合、それが他の生徒の刺激となり、教室全体が騒々しくなりがちになるので、注意が必要。

【図3】